

KONAN UNIVERSITY

ヤルカンドの街区：旧城内の歴史的プラン復原の 試み(歴史文化特集)

著者	堀 直
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	144
ページ	11-39
発行年	2006-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000856

ヤルカンドの街区

—— 旧城内の歴史的プラン復原の試み ——

堀 直

は じ め に

本稿は、中国の新疆ウイグル自治区のイエケン（莎車）県の人民政府所在地に隣接して広がっている、ヤルカンド旧城の空間構造の復原を試みたものである。現在の史料状況と筆者の力量から、比較的簡単な街路に的をしぼり、現在の形状と名称の提示にはじまり、可能なかぎり過去に遡って、若干の考察を加えている。

一．現在のヤルカンド旧城 —— 囲郭撤去の後 —— の街区

1. 利用する資料について

ここで言う「現在」とは、ヤルカンド旧城の囲郭（城壁）の撤去と新しい道路の建設が進んだ1970年代以降、を意味する。この時期の市街の形状を語るには、性格を異にする2種の資料が利用できる。

ひとつは『イエケン県地名図志（Yäkän Nahiyisiṅ Yär Namliri Khäritilik Tāzkirisi）』（Yäkän 1996(?)）であり、以降これを『地名図志』と略称する。

もうひとつが、1988年に我々が現地へ行けるようになってからの観察記録である。本稿では、筆者の6回の現地調査のデータを、適宜しかるべき形式で援用する。

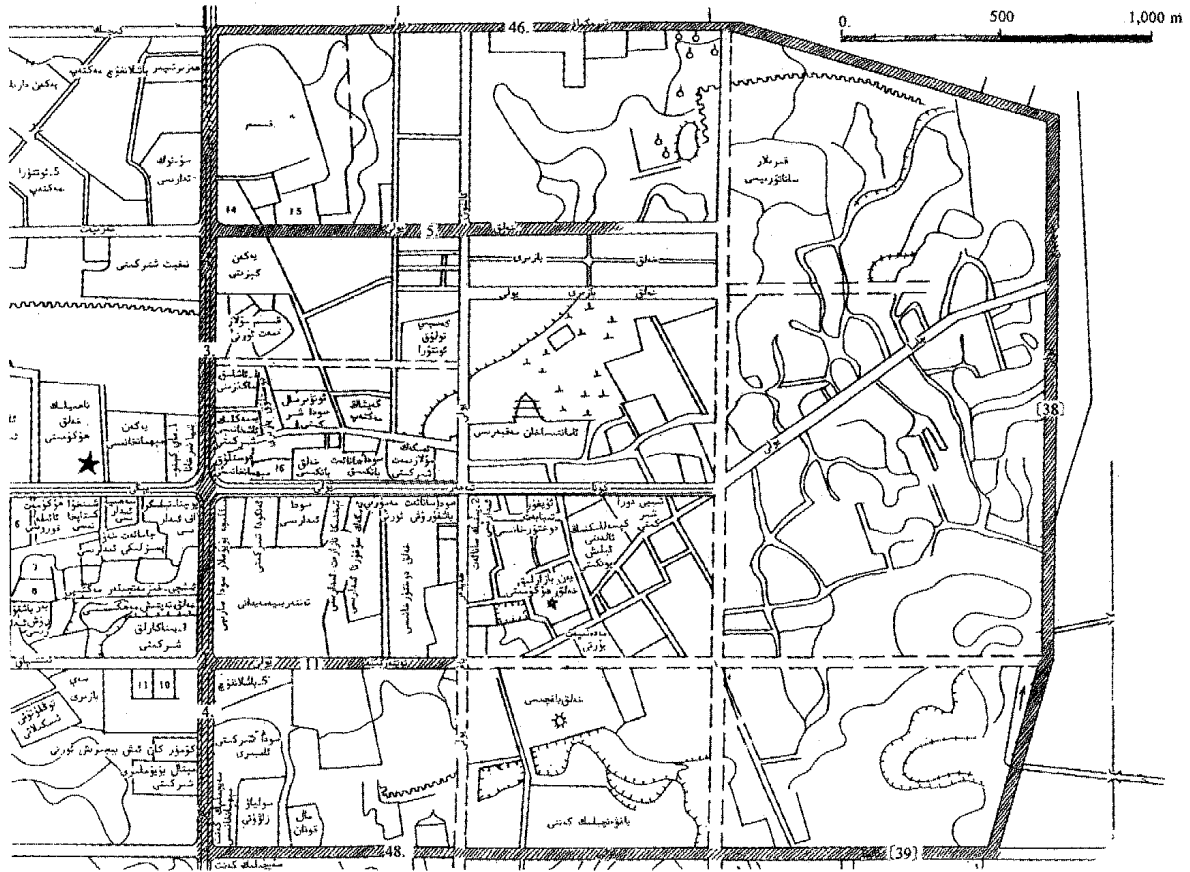
2. 『地名図志』に見るヤルカンド旧城

a. 都市プラン

現在のヤルカンド旧城の最も詳細な平面図は、『地名図志』の附図として掲

附図Ⅰ 『地名図志』 附図のヤルカンド旧城

斜線を付した街路はヤルカンド旧城の外縁の新道
 数字は『地名図志』の街路リスト（13～14頁参照）



げられたイエケン県城図（縮尺1万分の1）に含まれる。その図のほぼ東半分を占めているのが、ヤルカンド旧城であり、それは<附図Ⅰ>のようなものである。

1958年に撤去の始まったとされる清代の都市囲郭は、その一部が痕跡として図示されているが、その旧囲郭をすべて包摂する範囲の周辺道路を、附図中に斜線を加えて、梗概の理解に供してある。

それにしても、大略に過ぎるプランではある。けれども、この平面図に対応した街区の文字情報が『地名図志』には収められており、現今の市街の道路事情を知ることができる。より正確なプランの再現のために、次にそれを提示しよう。

b. 「旧市内」の街路——名称と所在——

『地名図志』には、2ヶ処で、県城内と周辺の街路についての記事を掲示している。

①「街・路 (yol・kocha)」(pp. 18-37) では、計80条。

②「市内及び周辺の街・路名 (bazari wä bazar ätrapidiki yol kochilarning nami)」(pp. 589-592) では、計48条。

以上のうち、①と②に共通する地名が37、①にあって②にない地名が45、②にあって①にない地名が11であり、都合で93の地名リストということになる。

これらから、＜附図1＞中に、斜線付きで提示した8条（①類6条・②類2条）で囲まれた範囲の内側に位置する街路を抽出すれば、それらは、一部分が該当するものも含めて、旧城内に所在したものだと見なすことができる。

以下に、それらを整理して提示しよう。掲載の形式は、凡例に従い、新市街の街路は省略している。

凡 例

上段： 数字——①での記載順・〔 〕は②の記載順
 街路名——（ ）は②に掲げる漢訳及び筆者の加えた註
 規模（長さ・幅・面積）
 下段：始まり——経由地——終わり
 略号：Y.=Yoli・K.=Kocha (Kochisi)・M.=Mahalla (Mahallisi)

c. 旧城を囲む街道（総計8条）

3. Häziritpir Y. 長2,005m. 幅31m.
 南 中央十字路—北 Misha 第2橋
4. Chinä-bagh Y. 長1,965m. 幅31m.
 北 中央十字路—南 (Gül-bagh 郷 (yeza)) Chinä-bagh 村 (känt)
5. Khälq Y. (人民路) 長1,396m. 幅12m.
 西 Yäkän Geziti 社前の十字路—東 Yar K. 小学校門前
11. Tántärbiyä Y. (体委路) 長 760m. 幅12m.
 西 Tántärbiyä 広場の十字路—東 Baghcha Aldi Y.
46. Teräk-bagh Yeŋgi Y. 長2,730m. 幅 8m.

- 西 Häzritipir 小学校前の交差点 — 東 (Gül-bagh 郷) Teräk-bāgh 村
48. Algha Y. 長3,545m. 幅10m.
西 (Gül-bagh 郷) Säychilik 村傍の交差点 — (東) Khanqa Dār waza Y.
- [38] Jahan-bagh Y.
Qawghat Dār waza (東門) — (Misha 郷) Shamal-bagh 村
- [39] Bay-döwä Y.
Khanqa Dār waza (南門) — (Aral 郷) Bay-döwä 村
- d. 旧城内の街道・街路・市場 (一部分で該当するものも含む — 総計68)
2. Kona Shähär Y. (老城路) 長1,236m. 幅31m.
西 中央十字路 — 東 Zäräpshan Magizin (葉爾羌商店) 前
14. Gäyshāṅg Y. (東関路) 長 670m. 幅12m.
西 Häzritipir Y. (飲食服務大樓) — 東 Altun Dār wazisi
15. Säy-khana K. 長 300m. 幅 8m.
北 Gäyshāṅg Y. — 南 (Gül-bagh 郷) Qumdāṅg 村の Säy-khana M.K.
16. Qumdāṅg Y. 長 1 km. 幅12m.
南 Gäyshāṅg Y. — Khälq Y. — Qumdāṅg 村の北の Teräk-bagh Y.
17. Mal Baziri K.. 長 500m. 幅 9m.
南 Gäyshāṅg Y. — 東 Charwa Mal Baziri
18. Tokhu Baziri K. 長 200m. 幅 5m.
北 Gäyshāṅg Y. — 南 Kona Shähär Y.
19. Ötäk Baziri K.. 長 200m. 幅 6m.
南 Gäyshāṅg Y. — 東 Kona Shähär Y.
20. Altun Y. 長1,150m. 幅 8m.
南 Kona Shähär Y. — Khälq Y. — 北 Teräk-bagh Y.
21. Gör-bagh Y. 長1,000m. 幅 12m.
西 Gäyshāṅg Y. と Altun Y. との交差点 — 東 Yar K.Y.
22. Altun Dār waza K. 長 500m. 幅 3m.
南 Gäyshāṅg Y. — 旧城壁跡に沿う — 東 Altun Mäscht K.
23. Altun Köl-beshi K. 長 400m. 幅 4m.
南 Altun Y. — Altun Mäscht に沿う — 東 再び (?) Gör-bagh Y.

24. Doppa Baziri (Chinar Tüwi M.) K. 長 200m. 幅14m.
北 Gör-bagh Y. — Kona Shähär Y. — 南 Jamä Aldi Y.
25. Chiltänlirim K. 長 400m. 幅 4m.
南 Gör-bagh Y. の映画館 Y. — Chiltän Mazar — 西 再び Gör-bagh Y. に出る袋小路
26. Chasa Y. 長 900m. 幅12m.
西 Kona Shähär Y. の端の市場 — 東 Qawaghat Därwaza の旧市壁の東門跡
27. Tömür Ghoja Köl K. 長 260m. 幅 5m.
北 Chasa Y. の Tömür Ghoja Köl の端 — 南 Orda Köl M.
28. Orda Köl -beshi M. (Orda Köl を中心とする 5 小 K.) 面積 8,000 m².
北 Tömür Ghoja Köl M. / 東・北 Ara Mäscht M. / 西 No Tüwi / 南 Toghraq Tüwi Y.
29. Ara Mäscht M. (Ara Mäscht を中心とする 4 小 K.) 面積810,000 m².
西 Orda Köl M. / 南 Konchilik Y / 東 Yäkän 鎮福利院 / 北 Dori Qaza M.
30. Dori Qaza (Dorulqaza) K. 長 240m. 幅 4m.
北 Chasa Y. — 2 支 — ①Ara Mäscht M. の東の小路 ②東 Yäkän 鎮福利院
31. Haji Khaldar K. (Hijir Khalta K.) 長 310m. 幅 4m.
(北) Choṅg-qur eriq K. — 南 Konchilik Y.
32. Qizil Köl -beshi K. 長 400m. 幅 5m.
北 Yäkän 鎮福利院 — 東南 Konchilik (村) Y.
33. Awki K. (Ababakri Köl) 長 450m. 幅 7m.
北 Chasa Y. の Aznä Mäscht 前 — 東 Konchilik 村
34. Choṅg-qur eriq M.K. 長 200m. 幅 4m.
(南) Chasa Y. — 東 Konchilik (村) Y.
35. Chimgärlik K. 長 400m. 幅10m.
北 Chasa Y. (Chasa 村). — Konchilik (Chimgärlik 工場傍) の Bulaq Beshi Y.
36. Kāshmirlär K. 長 200m. 幅 4m.
西 Tömür Ghoja Köl-beshi — 南 袋小路.
37. (Konchilik) Bulaq-beshi K. —
北 No Tüwi K. の端 — 東 Konchilik の Bulaq Beshi.
38. Yar K. 長 800m. 幅12m.
西 Görbagh Y. の端, 文化公園の北 — 旧城の東門 (Qawghat Därwazisi.) 跡

39. Soda Y. (Daṅḡdar K. 商業路) 長 700m. 幅10m.
文化公園の北 Yar K.Y. — Khālq Y. — 北 Teräk-bagh 村
40. Teräk-bagh Güzär K. 長 500m. 幅 8m.
南 Yar K.Y. の Güzär M. — 旧城の壁の北の Teräk-bagh 村
41. Choṅḡ Orda Köl -beshi K. 長 400m. 幅 8m.
南 Yar K.Y. — 北 Teräk-bagh M.
42. Döṅḡ K. 長 360m. 幅 7m.
南 Yar K.Y. — 県残廢院 — 東 Teräk-bagh M. K.
43. Gülghun Köl -beshi K. 長 300m. 幅 4m.
(Yar K.Y. の) Kocha Aghzi Köl -beshi — Gülghun Köl-beshi
44. Shah-mänsur K. 長 300m. 幅 4m.
西 旧 Teräk-bagh 門 — 北 Shalchilar K.
45. Khishchi M. K. 長 400m. 幅 6m.
Daṅḡdar K. の端 — Teräk-bagh 村手前の舗装道.
47. Baghcha Aldi Y. 長 400m. 幅 8m.
西 Häydär Bagh Y. — 東 Yeṅgi Bazar Y..
49. Häydär Bagh Y. 長 897m. 幅14m.
北 Kona Shähär Y. — 南 Baghcha Aldi Y.
50. Yeṅgi M. Y. 長 340m. 幅 8m.
北 Kona Shähär Y. — 南 Baghcha Aldi Y.
51. Khändäk Köl K. 長 400m. 幅 8m.
東 Yeṅgi M. Y. — 2支①Tashqiri Khändäk②Ichkiri Khändäk — 西 Häydär Bagh Y.
52. Sopikar K. 長 350m. 幅 5m.
北 Khändäk Köl K. — 南 Manju Köl M.
53. Äsmikar K. 長 200m. 幅 5m.
南 Baghcha Aldi Y. — 北 Manju Köl Y.
54. Manju Köl M. 長 800m. 幅 3m.
北 Sopikar K. の端 西 Rawaq M. 東 Ichkiri Khändäk 南 Äsmikar K.
55. Rawaq M. 長 300m. 幅 4m. ?
東 Häydär Bagh Y. — 南 Bagh M.

56. Bagh M. K. 長 400m. 幅 10m.
北 Baghcha Aldi Y. — Yäkän Baghwänchilik Mäydan (園芸場) — 南 Algha Y.
57. Yeŋgi Bazar Y. 長 400m. 幅 12m.
北 Orda Aldi Y. — 東 Khaniqa Därwaza Y.
58. Salikhan Köl -beshi K. 長 300m. 幅 3m.
西 Yeŋgi Bazar Y. — Jamä Mäscht 北側門の水路に沿って — 東 Jamä Aldi Y.
59. Orda Aldi Y. 長 280m. 幅 12m.
西 Yeŋgi Bazar Y. の Yäkän 鎮政府前 — 東 Doppa Bazari Y.
60. Khaniqa Därwaza Y. —
北 Khaniqa Güzär 分岐点 — Khaniqa Däzwazisi — 南 Aral Yoli の分岐点
61. Jamä Aldi Y. 長 600m. 幅 14m.
北 Doppa Bazar — 南 Khaniqa Därwaza Y. の Güzär
62. Halämdan Köl -beshi M. 面積 15,000 m².
南 Kona Shähär Y. — 東 Sut Qaymaq Bariri
63. Juwichi Köl M.K. 長 350m. 幅 6m.
西 Jamä Aldi Y. の Jumä Mäscht 前 — 東 No-tüwi Y.
64. No Tüwi K. 長 700m. 幅 8m.
北 Kona Shähär Y. の Sut-maymaq Baziri — 南 Konchilik Y.
65. Kichik Köl K.. 長 600m. 幅 4m.
南 Jamä Aldi Y. — 東 Toghraq Köl K. 東北 Döŋg K. -Toghraq Köl K.
66. Qoshmuchä Äträt K. 長 1,200m. 幅 5m.
西 Jamä Aldi Y. の曲がり角 — Yäkän 鎮 Qoshmuchä Äträt 工場 — 北 Konchilik Y.
67. Toghraq Tüwi Köl K. 長 600m. 幅 4m.
西 Jamä Aldi Y. の曲がり角 — 東 Konchilik Y.
68. Säginiaz Köl K. 長 700m. 幅 3m.
北 Jamä Aldi Y. — Yaŋgaq Köl -beshi を廻り — 南 Khaniqa Därwaza Güzär
69. Chasa Köl -beshi K. 計 長 600m. 幅 4m.
北 Yar Kocha Y. Chasa Köl-beshi — 2 支 — ①東 Quruq Köl ②南 Saray Köl Beshi K.
70. Äŋglikchi K. 長 250m. 幅 4m.
南 Chasa Y. Rästä 交番正面 — 北 Chasa Köl Beshi

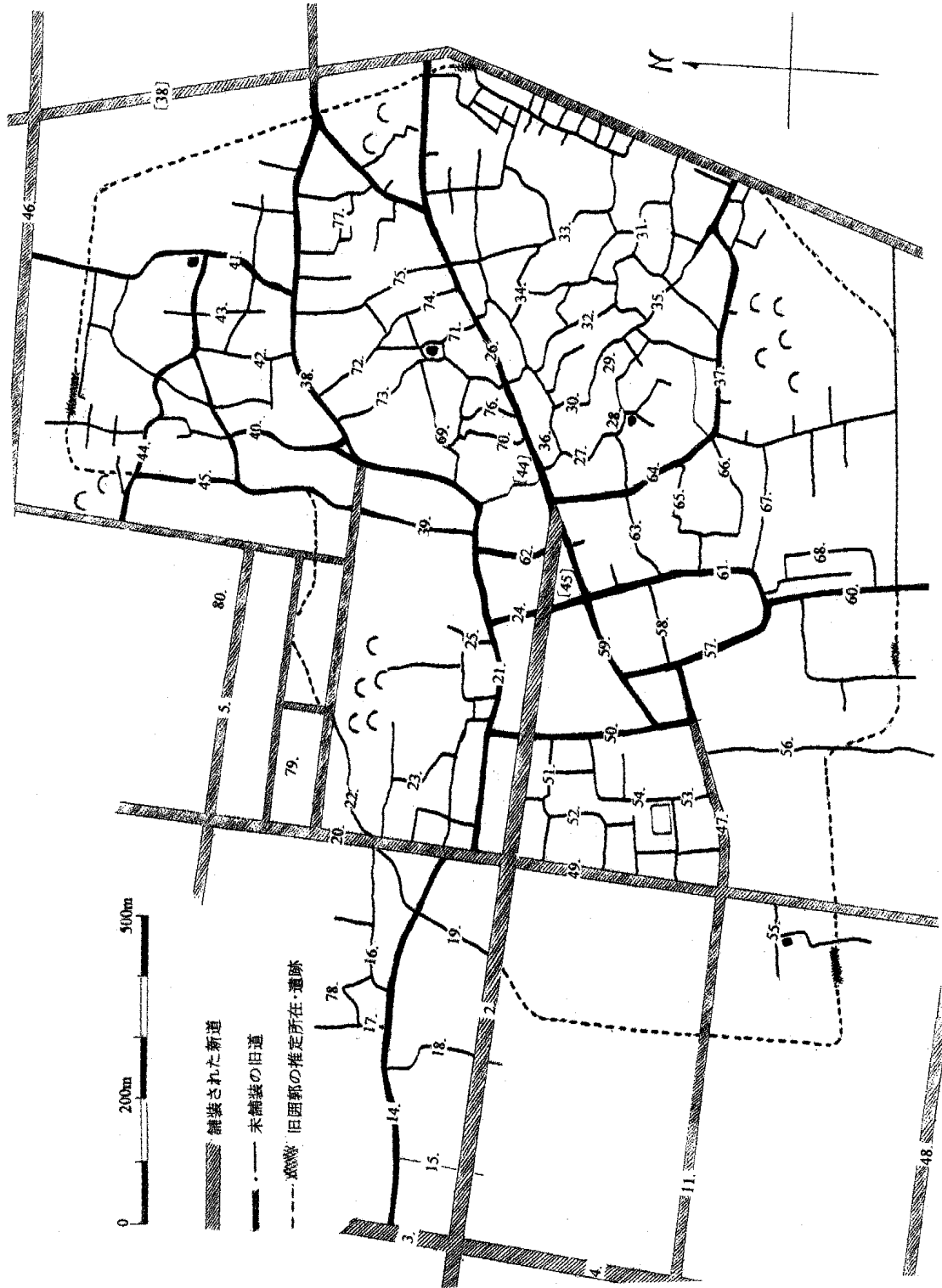
71. Saray Köl M. K. 長 260m. 幅 4m.
南 Chasa Y. — Saray Köl — 東 再び Chasa Y.
72. Aq Mäscht M. K. 長 300m. 幅 5m.
南 Saray Kol K. — 北 Yar K.
73. Quruq Köl -beshi K. 長 200m. 幅 4m.
北 Yar K.Y. — Quruq Köl — 東 Aq Mäscht Y.
74. Döng K. 長 350m. 幅 5m.
南 Chasa 小学校. — 西 Aq Mäscht M.K.
75. Naghrichilar K. 長 500m. 幅 5m.
南 Chasa Y. Chasa 小学校の東側. — 北 Yar K.Y. Teräk Bagh Güzär
76. Shäytan Köl K. 長 300m. 幅 4m.
南 Chasa Y. の交番前 — 北 Chasa Köl Beshi K.
77. Äwrishim-kar K. 長 500m. 幅 5m.
南 Chasa Y. — 北 Yar K. Y.
78. Dostluq Soda Baziri (友誼市場) 面積 6.5畝
Gäyshähg Y. (東関路) の北側の Kona Jowa M. / 東関路の北面
79. Charwa-mallar Baziri (畜牧市場) 面積 17畝
北 Khälq Y. 西 Alun Y. 南 Chiltän Mazar 東 Soda Y. / 東関路の北面
80. Qumdäng Khälq Baziri (人民市場) 面積 125畝 (2,761m²)
西・南 Khälq Y. 東 Yipäk Y. 北 Qumdäng村 / Qumdäng 村 (人民路北面)
- [44] Ghädigärlik K. (老城広場路)
Ghädigärlik Mäydani (老城広場) の西の2つの K.
- [45] Zäräpshan Uniwersal Soda-bazari (葉爾羌市場)
Kona Shähär Y. の南側 (旧 Doppa Bazari K.)

3. 主要な街路の所在と名称 —— 現地調査の結果から ——

さて筆者は、1988年3月以来6回現地を訪問し、そのうち4回(88年3月・95年5月・02年8-9月・05年8月)、それぞれ短時間の不徹底なものながら、旧市街の街区の調査を行った。その最新の結果を、『地名図志』のデータに——とりわけ附図の上に——重ねて整理すれば、<附図Ⅱ>のようなものとなる。

附図Ⅱ 2005年のヤルカンド旧城

街路に付した数字は『地名図志』の街路リスト(14~18頁参照)



二. 旧城に囲郭のあった頃—— 1965年以前のヤルカンド ——

1. 囲郭の撤去と新道の建設—— 1950-60年代からの変容 ——

周知のように、ユーラシアの歴史的都市は堅固な囲郭（城壁）をもっており、ヤルカンドも例外ではなかった。その囲郭の取り壊しは1958年に、新しい計画道路の建設は1965年に始まったとされている（註4『莎車県志』76-77頁）。ただし、先の〈附図Ⅰ〉で見て取れるように、城壁の極く一部はまだ残されているし、新道路の建設も、旧市街の内部ではあまり進んでいないようである。

とは言え、旧市街の囲郭の大部分が撤去される以前の形状を、中国からの情報で知ることはできない。幸いなことに、1960年代に始まった人工衛星からのリモートセンシングが、この問題解決のための貴重な情報を提供してくれる。それらのうちでは初期のものである、地上解像度3-8 mの米軍偵察衛星写真（CORONA）の画像が当面は有用である。¹⁾

附図Ⅲ CORONA 衛星からのヤルカンド旧城写真

(Data available from U.S.Geological Survey, EROS Data Center, Sioux Falls SD.)



2. 宇宙からの情報——1965年8月22日のヤルカンド旧城——

a. コロナ衛星写真のヤルカンド旧城

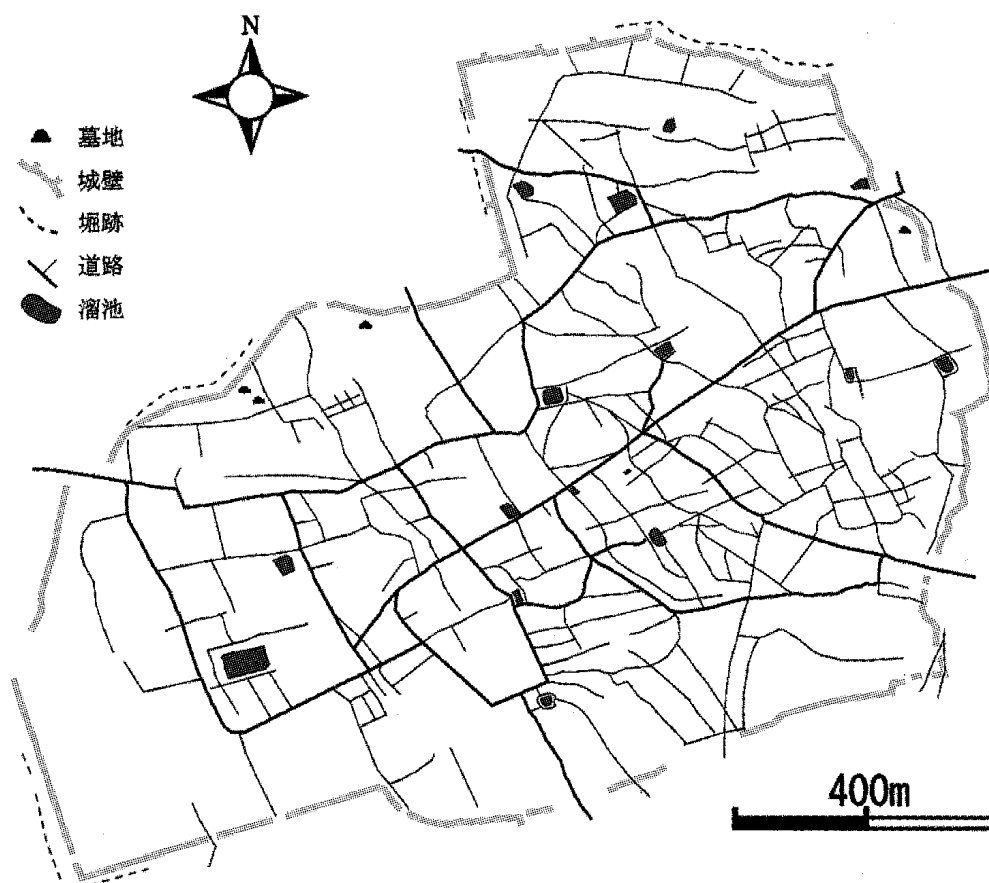
この写真（＜附図Ⅲ＞）は、1965年8月22日の撮影に係り、そこに写る都市ヤルカンドには、いまだ新道は存在せず、囲郭も明確な輪郭をもって存在を確認することができる。

b. 衛星写真にみるヤルカンド旧城のプラン

ただし初期の画像の故に、白黒で3-8m程度の解像度の写真であり、これから正確な地上の構造物を読みとることは、不慣れな筆者のなし得ることではない。それで、この作業は奈良女子大学大学院の渡邊三津子・田然両氏に全面的に委嘱した。専門家の両氏にとっても、真夏の生い茂った木々の影などが障害となって、狭いものでは幅2-3mにすぎない街路を白黒写真から画きおこすことは、いささか難渋されたようである。それでも、このようにも解釈できるというレベルで、敢えて製図していただいたのが＜附図Ⅳ＞である。

附図Ⅳ CORONA 衛星に基づく1965年のヤルカンド旧城プラ

製図：渡邊三津子・田然



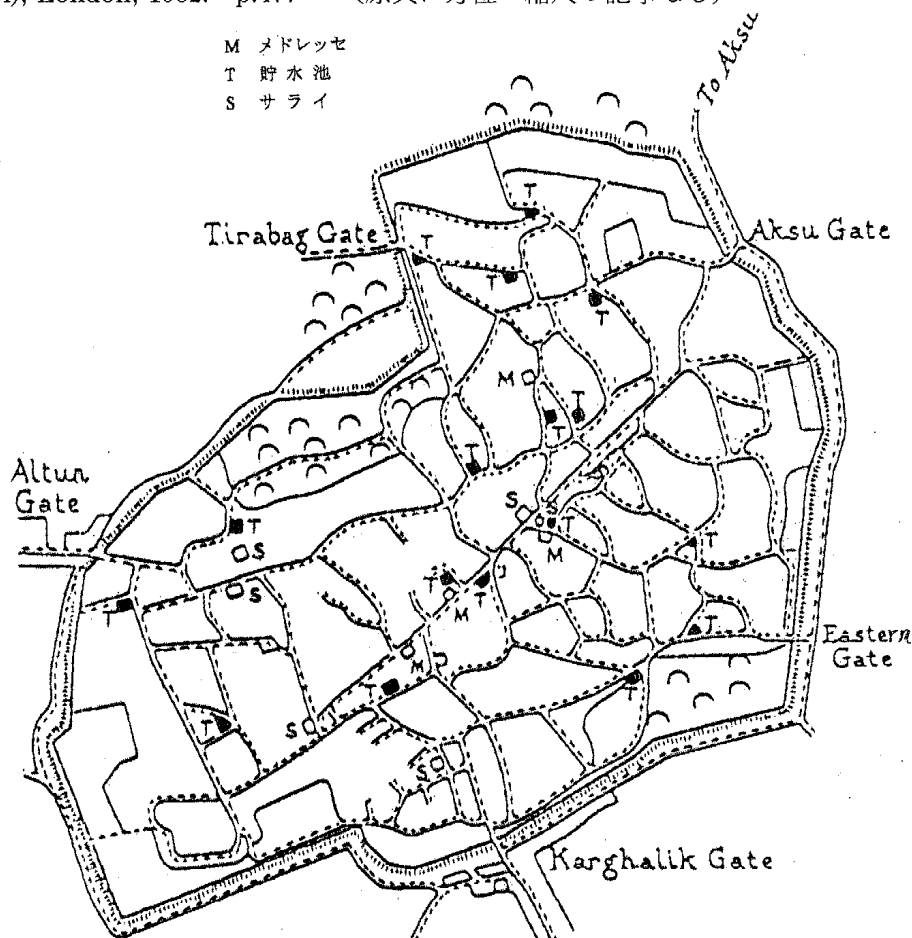
この1965年のプランが、新しい計画道路と囲郭を除けば、＜附図Ⅱ＞の2005年のそれと、市内の主要街路については、ほとんど変化の見られない点は容易に確認されるであろう。さらに、これらと1913年のイタリア隊の調査報告の附図（＜附図Ⅴ＞）とを対比してみても、細部での相違はあるものの、それらは街路の改修による変貌というよりも、むしろ技術的な誤差（ズレ）に過ぎないのでは、と思える程に近似している。

むろん今後も、3種の都市図を隔てる時期の間の街路の変動を視野から外すつもりはないけれども、2005年－1965年－1913年の、ほぼ100年近い間、旧市内部の街路は、とりわけ5つの門との連結の枠組みには、大きな変化はなかったと判じて許されるであろう。

このことを押さえたうえで、次にその街路によって区画される街区の名称を、過去に遡って見てみることにしよう。

附図Ⅴ 1913年のヤルカンド旧城プラン

Filippi, F. de, *The Italian Expedition to the Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan* (1913-1914), London, 1932. p.477 (原典に方位・縮尺の記事なし)



3. 清末ヤルカンドの街路の名称——マハッラを手懸かりにして——

a. マハッラ

中央アジアのイスラーム都市の住民がマハッラと呼ばれる組織をもち、それらが居住する街路の同一性に基づいていることは良く知られており、ヤルカンドも同様であった。

18世紀後半の『五体清文鑑』には、マンジュ語の *hoxon*・漢語「坊」に相当するテュルク語（現ウイグル語に相当）に *mahaliya* を掲げているし（『五體清文鑑譯解 上』京都（京都大学文学部 内陸アジア研究所）1966, p. 590.），19-20世紀に現地で作成されたテュルク語契約文書でも、都市住民の個人認定は所属のマハッラ名で示されている〔堀 01〕からである。

では<附図V>に対応する20世紀初頭や、それ以前のヤルカンドの市内のマハッラの具体像は如何？となるとほとんど判明していない。けれども幸いなことに、当該時期のヤルカンドのその数と名前については、ひとつの手懸かりが残っている。

b. 1902-03頃のヤルカンドのマハッラ名——Halle のハルトマン文書から——

現在、ドイツのハレ市にあるドイツ東方社会学図書館に所蔵されている、M. Hartmann のコレクションのうちに、B-192と番号の付けられた数件の文書片の束がある。²⁾ そのなかの1点の漢文ヴィザの紀年（光緒28年）などから、B192類は、彼が1902-03年に現地ヤルカンドで入手した資料のひとつだと判定される。そのうちの1枚(E)は、最上部に「ヤルカンドのマハッラの一覧表 (Naqsha-yi ta'dād-i mahalla-yi Yarkand)」と題記があり、その下に罫線で区画された4つの欄があり、それぞれの頭にヤルカンドの門の名前（左端の欄のみに2門、残りの3欄に各1門）が掲げられている。そして各門の下欄の1行につき1つのマハッラの名前の記載があり、その総数は109にのぼっている。文字そのものは手慣れた運筆ではあるが、走り書きのメモに近く、点や附線も不規則な、*rasm* ともいえないチャガタイ語表記で、端的に言って「知っていなければ読めない」部分が多い。ヤルカンドの現在の住人たちの読解案を取り入れながら整理した、B192(E)の記事内容が以下の一覧表である。

転写と掲示にあたって、4つの欄のそれぞれに左から A.~D. の分類記号と、その所属のマハッラの記載順の番号をつけた。なお附記すべき表示上の説明は

凡例のとおりである。

— 凡 例 —

＝前掲『地名図志』の現在の街路名と一致するもの。その番号（13～18頁参照）。

→〔A-23.〕本文書の中の共通・関連する地名の存在と所在。「A所属の23.参照」の意

? マハッラ名の読みの別案

* 地名（所在）比定のための補足コメント。

○ 筆者の現地調査による名称と所在の確認例（その日付）。

A. Altun Dār waza

- | | | |
|---------------------------|-------------------|---------------------|
| 1. Yeṅgi M. ³⁾ | =50. | ? Yipäk / Beg |
| 2. Rawaq M. | =55. | |
| 3. Ötäk Bazar M. | =19. | |
| 4. Qara Dār wazä M. | | *旧 Rawaq 門か（堀87:40） |
| 5. Şufi-kar | =52. Sopikar | |
| 6. Altun Teräklik | | ? Altun Türklik |
| 7. Yeṅgi Bazar M. | =57. | |
| 8. Chong Gör-bagh | →〔A-23.〕 | |
| 9. Abdal M. | | |
| 10. Altun Güzär M. | | *Altun 墓地か |
| 11. Altun Padishah | | 同 上 |
| 12. Kichik Rawaq | →〔A-2.〕 | |
| 13. Chong Khändäq | =51. | |
| 14. Rawq-bagh | →〔A-2.〕 | |
| 15. Länggär Kocha | | |
| 16. Ghiyas Beg | 68. Sägin yaz Köl | |
| 17. Kichik Gör-bagh | →〔A-23.〕 | |
| 18. 'Ushur Baqi Köl | | |
| 19. 'Ösäk Akhon | | |

20. Zaghir Chopa
21. Hāydār-bagh =49.
22. Ara Orda 59. Orda Aldi
23. Gör-bagh =21.

23

B. Khanqa Dārwarzä

1. Tömür Khoja Köl M. =27.
2. Pesächi M. ? Pichachi
3. Choṅg Bazar K.
4. Daṅgdar M. =39.
5. Ichkirki Daṅgdar M. → [B-4.]
6. Ichkirki Pesächi M. → [B-2.]
7. Char-su Köl M. 69. Chasa Köl, → [C-1.]
8. Qochqar-‘ata
9. Choṅg Hälämdan =62.
10. Ichkirki Hälämdan → [B-9.]
11. Naşr Khoja Köl *Valikhanov
12. Ghäzär Gärlik
13. Kichik Yar Kocha 38. Yar K.
14. Dölä chokan M.
15. No tüwi M. =64.
16. Ziyaba Kocha
17. Döṅg Kocha =74.
18. Chegi (空画) M.
19. Naşr al-Lah Khojam M.
20. Särwinaz M.
21. Yaṅgaq M. (68. Yaṅgaq Köl)
22. I‘dabbä Khana M.
23. Wäkhfi-bagh M.
24. Juyächi M. 63. Juwichi Köl

25. Kichik Orda M.
26. **Khanqah** Därwazä M.

26

C. **Mäskhär** Därwazä

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. Char-su Köl M | =69. , → [B-7.] |
| 2. Haji Khaldar M. | =31. |
| 3. Toghraq-töbi Chong Köl | 67., → [C-5. -28. -29.] |
| 4. Qäländär Khana M. | → [D-11..] |
| 5. Toghraq-töbi Kichik Köl | → [C-3. -28. -29.] |
| 6. Siliq Mäsjit M. | |
| 7. Qäbzi Güzär M. | |
| 8. Qazi Köl M. | |
| 9. Toghraq Köl | |
| 10. Tashqicha Paz Bazar M. | → [C-23.] |
| 11. Möchinch 'uluq M. | |
| 12. Shakhar Kocha | |
| 13. Tögmän -beshi Häzim 'Äli M. | ○05-8-26 Tögmän-beshi K. |
| 14. Qiziliq M. | |
| 15. Kök Saray M. | ○05-8-24 |
| 16. Nämät Bay Köl M. | |
| 17. Ustazamir M. | |
| 18. Darulfäz M. | |
| 19. Saray Köl -bash | =71. |
| 20. Orda Köl M. | =28. |
| 21. Köwrük Köl M. | 73. Quruq Köl |
| 22. Choqir Eriq-beshi | 34. Chongqur-eriq |
| 23. Ichkirki Paz Bazar | → [C-10.] |
| 24. Bulaq-bash M. | =37. |
| 25. Khoja Yusf M. | |
| 26. Aq-mäsjid M. | =72. |

27. Ara-mäsjid M. =29.
 28. Toghraq-töbi Döng =67. Toghraq Tüwi Köl
 29. Toghraq-töbi Köl -besh → [C-3., 5.]
 30. Mähräm Beg M.
 31. Registan M. *Valikhanov, 亦格斯塘巷 (小南門内)
 32. Ämgäkchilär M.

32

D. Teräk-bagh wä Qabahat ma'ruf Aqsu

1. Naşr-kar M.
 2. Ishik Bazar
 3. Äbu Bäkri M. 33. Awki
 4. Shähidan Köl 76. Shäytan Köl
 5. Saghärci M. ○05-8-25 Yar K.— Char-su Y
 6. Äbrishim-kar M. 77. Awrishim-kar ○05-8-25
 7. 'Abasi Khoja Aqsaqal M.
 8. Soqa Köl M. *Valikhanov ○05-8-25 Yar K.—
 9. Kök-mesjid M. ○02-8-30 Yar K. 北端 西
 10. Kichik Kocha M.
 11. Qäländär Khana M. → [C-4.]
 12. Mir Hässän Khälifäh M.
 13. Teräk-bagh Orda M. 41. Chong Orda Köl
 14. Teräk-bagh Mulla Qabil Helim M.
 15. Teräk-bagh Sariq-bash M.
 16. Küchar Köl M.
 17. Gülgün Köl M. =43.
 18. Teräk-bagh Döng-kocha M. =42.
 19. Teräk-bagh Shah Mansur =44. *Mansur の語, 抹消, 書き直し
 20. Teräk-bagh Yengi M. =46.
 21. Bash Juwa M.
 22. Char-su Tömürchi M.

23. Chong Kocha M.

24. Kichik Andijan M.

→ [D-27.]

○02-8-25 Andijan Köl

25. Munar tüwi M.

26. Kemä M.

27. Chong Andijan M.

→ [D-24..]

28. Ibrikchi M.

(28 — 原文に欠 —)

最後（左端）の D. のテレック＝バグ門（西北門）とカヴァハト門（東北門）の欄に列挙されたマハッラの末尾にだけは、小計にあたる数字の記載がなく、総計も109が確定的な数値であるのかには確信がもてない。ではあるが、1902-03年頃のヤルカンド城内のマハッラをほぼ完全に網羅したリストだとみてまず間違いはない。個別のマハッラに所在の情報がないのは残念であるが、それらを4群に集約した5つの門の位置は確定しており、名前の一致や共通・関連性から、前掲の『地名図志』や現地調査から現在の地図の上に比定できるマハッラが半数近くになる。そしてこれらの情報を総合すれば、B192 (E) 文書では、1902-03年頃のヤルカンド市内のマハッラが、

A. アルトゥン（西）門から近い 市街の西・西南隅

B. ハンカー（大南）門から近い 市街の南隅

C. メスハレ（小南）門から近い 市街の東・東南隅

D. テレック＝バグ（西北）門とカヴァハト（東北）門から近い 市街の北・東北隅

の4つの区域に整理して列挙されており、そのような理解と説明の仕方があったことを示している。これと近い時期の1910年頃の、ヤルカンド旧城内の学校に関する記録（『新疆図志』巻39 — 学校2（学堂）莎車府の条）にも、5つの小学校の所在を、

回城西門（Altun D.）内 蘇皮介巷 (Safi-kar 52. A-5.)

南大門内（Khanqa D.）内 九鳥奇可巷 (Juwichi Köl 63 B-24.)

南大門内（Khanqa D.）内 艾南不旦巷 (Hälämdan 62 B-9.-10.)

南小門内（Mäskhär D.）内 亦格斯塘巷 (Registan C-31.)

回城内 阿同八柵 (Altun Bazar A)

のように、「某門内の何々巷」の形式で示しており、市内のマハッラの所在を示す、ひとつの定形表現であったと推察される。これが行政上の公式の制度であったかについては、次掲の『大木文書』との違いや、ハルトマンのB192 (E) 文書の入手の経緯などを明らかにした後に、視点を住民組織に改めた別稿にて検討することにして、最後に19世紀以前のヤルカンドの街区の有り様へ論を進めよう。

三. 19世紀の『大木文書』にみるヤルカンド旧城

1. 清代回疆期のヤルカンド——『大木文書』の5つの「城上」——

さて19世紀の60年代以前、つまり新疆省の成立や西北ムスリムの反乱の前の時期、ヤルカンドを含むタリム盆地のオアシス地帯は、清朝から回疆（ムスリムの地域）と呼ばれていた。つまり、18世紀の半ばに清がこの地に進出してきてから、1860年までのおおよそ1世紀間を回疆期と呼ぶことができる。この頃の清の現地統治は、治安の維持と経費の節約を優先した間接的な制度を特色とし、当該地域の日常生活などについての情報は極めて少なく、都市の形状についても事情は同じである。

ただ幸いなことに、唯一ヤルカンド＝オアシスについては、その統治制度のかなりの詳細を、東京大学東洋文化研究所所蔵の『大木文書』と通称されている史料から知ることができる。

a. 『大木文書』の5つの「城上」と43のマハッラ

『大木文書』が、1855-56年頃に現地で作成された徴税関係の行政文書であることは、いくつかの拙稿にゆずるが〔堀79・97など〕、本稿で問題にしている都市ヤルカンドの記事は巻頭に5つの「城上」の43の「巷」として掲げられている。

43の「巷」の記録のうち、それぞれの規模や税額は本稿での考察に直接の関連がないので省略して、その固有名詞だけを列挙すれば、次のとおりである。

b. 『大木文書』葉爾羌城内の「巷」Mahalla

（番号I・1.は記載順。①は筆者の付した仮称。ローマ字表記は筆者の現代ウイグル語の転写案及び幾人かのウイグル住民からの仮説。続く数字は『地名図志』の街路名とハレB192 (E) のマハッラ名とその所在の推定区域。右端は補足

情報や語義の仮案。)

I. 城上①

- | | | | |
|-------------|------------------------|-----|-----------------|
| 1. 木那吐爾吐維 | Munartur tüwi | | D-25. |
| 2. 拜斯巴雜 | Paz bazar | | C-10.-23 |
| 3. 挑烏拉克吐皮 | Toghraq tüwi | 67. | C-3.-5.-28.-29. |
| 4. 玉里恰克 | (Yurchaq) | | |
| 5. 阿哈密奇特 | Aq michit | 72. | |
| 6. 沙哈爾奇伊瑪買提 | (Shakharchi Imammat) | | |
| 7. 阿維柯爾 | Ay köl | | ○61.Jamä の傍(B) |
| 8. 愛連木垣 | Hälämdan | 62. | 艾南不旦巷(B) |
| 9. 散烏拉奇 | Saghärchi | | D-5. |
| 10. 伊克奇 | (Yikchi) | | |
| 11. 皮恰克奇 | (Pichaqchi) | | |

II. 城上②

- | | | | |
|-----------|---------------|-----|--------------|
| 1. 海孜古楚里 | Haji Kaldar | 31. | (C) |
| 2. 密里奇愛盖爾 | (Mifchigar) | | ? 里→黒 |
| 3. 愛布熱奇木卡 | Awrishim-kar | 77. | D-6. |
| 4. 克布卡爾 | Kowruk Köl | | C-21. |
| 5. 斯奇里 | | | |
| 6. 色拜爾 | Shakhar | | C-12. |
| 7. 愛盖奇 | Awki | 33. | (C) |
| 8. 密斯墾 | Mäskhär | | C Valikhanov |

III. 城上③

- | | | | | |
|-------------|----------------------|------|-------|-----|
| 1. 鉄米和加阿拉巴什 | Tömür khoja köl bash | 27. | B-1. | 阿→柯 |
| 2. 達布蘇吐維 | (Därwaza tüwi) | | | |
| 3. 腦吐維 | No-tüwi | 64. | B-15. | |
| 4. 和卓玉素普 | Khoja Yusuf | | C-25. | |
| 5. 愛提盖里克 | Hetigarlik | [44] | | |
| 6. 伊奇罕那哈爾 | Ichiki khanqah | | (B) | |
| 7. 刁熱合雜爾 | Dori Qaza | 30. | (C) | |

- | | | | |
|-----------|----------------|-----|-------|
| 8. 黒契奇 | Khishchi | 45. | (D) |
| 9. 巴達瓦普 | | | |
| 10. 素魯坦伯克 | (Sultan Beg) | | |
| 11. 開地曼奇 | (Kätmänchi) | | |

IV. 城上④

- | | | | |
|-----------|-----------------|-----|--------------|
| 1. 格巴哈 | Gör-bagh | 21. | A-23. |
| 2. 阿屯 | Altun | 20 | A-6.-10.-11. |
| 3. 罕南哈爾 | Khanaqah | 60. | B |
| 4. 帕拉特 | (Barat) | | |
| 5. 阿屯達烏雜 | Altun Därwaza | 22. | A |
| 6. 阿熱密奇特 | Ara-michit | 29. | |
| 7. 海資 | (Hajji) | | |
| 8. 愛吉巴雜特 | (Hajji Bazat) | | |
| 9. 那哈熱奇 | Naghrichi | 75. | (D) |
| 10. 伊里滿朶斯 | (Ilman-gas) | | |
| 11. 推古滿 | Tügmän | | C-13. |

V. 城上⑤

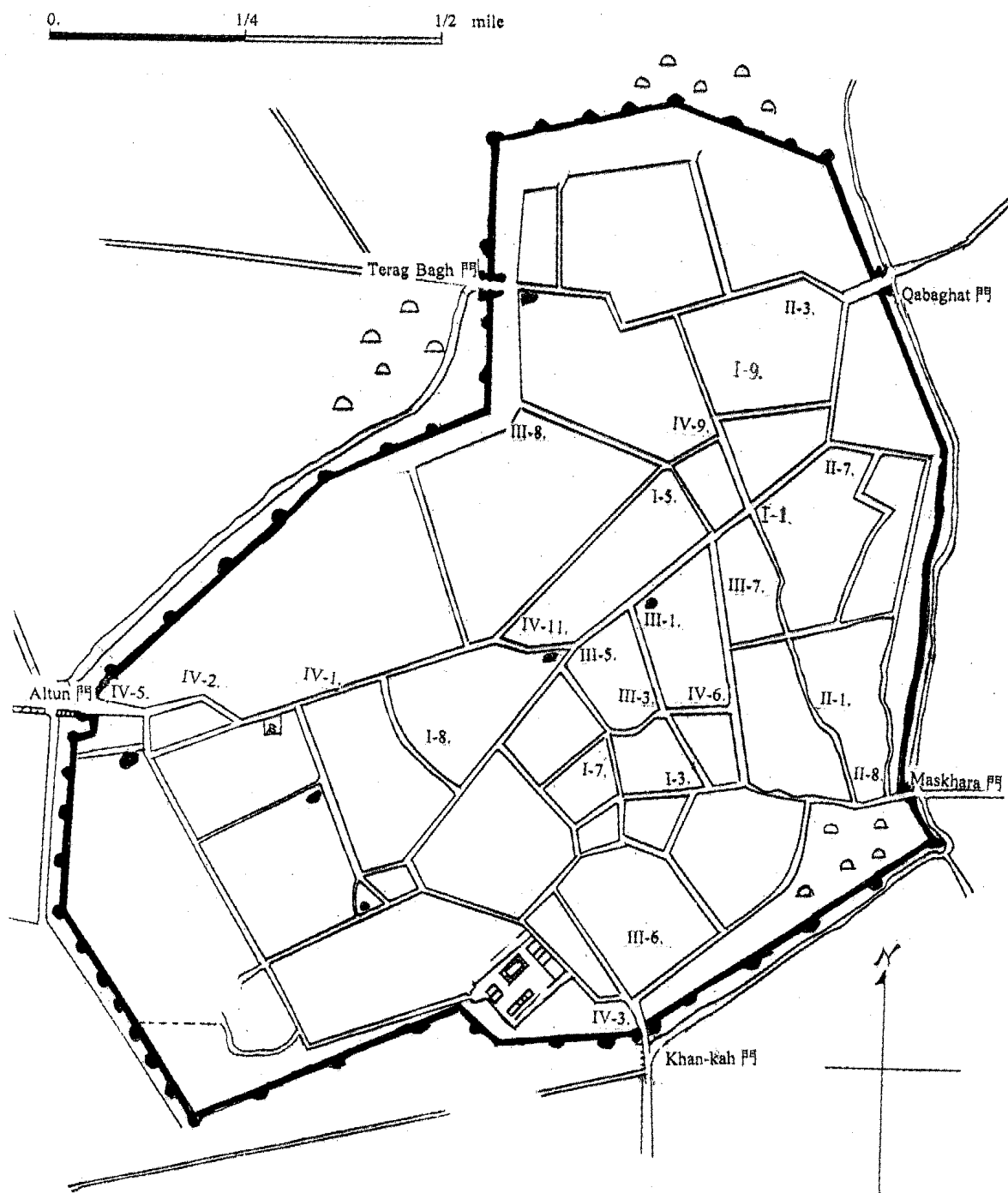
- | | | | |
|---------|---------------|--|------|
| 1. 栽盖爾奇 | (Zargarchi) | | |
| 2. 阿布達爾 | Abdal | | A-9. |

c. 『大木文書』の巷と「城上」

以上の「巷」は、その数と公式文書である『大木文書』の性格から、街路(kocha)ではなく、行政単位(マハッラ)を示していると考えてよい。となると、1902-03年のハレ B192 (E) と対応してしかるべきであるけれども、それとは半数程度の類似しか指摘できない。さらには、所在が確かな現在の『地名図志』の街路名とは半数以下の比定しかできないのが実情である(比定される地名は、前掲の2つのリスト中では、網掛けによって示している)。その理由のひとつは、『大木文書』のマハッラ名が必ずしも1855-56年の実情の反映ではなく、更に1世紀近くも昔の、清のヤルカンド征服当初の1750年代の頃の戸籍を墨守していたという実態の由来するのであろう〔堀79; 23・Valikhanov 62; II-358〕。そしてまた、別の可能性も想定されるが、この点は次章にて言及す

附図VI 1873年のヤルカンド旧城と『大木文書』の巷

Forsyth, Th.D., *Report of a Mission to Yarkand in 1873*, Calcutta, 1875. p.421



ることにして、『大本文書』の漢字表記のマハッラ名のうちで所在の推定できるものを、旧城プランのひとつ——1873年のイギリス人フォーサイス使節団の報告書中の附図——の上に表示すれば、＜附図VI＞のような分布を得られる。

ここで初めて引用したフォーサイス隊の図は、ヤルカンド都市図の最も初期の図であり、硬質な直線の軌跡を特徴とするけれども、先掲の曲線的な＜附図V＞とは大きな異同のないことが明らかである。とすれば、現在の地名と音通するものを想定される場所に投影しても大きく外れることはないであろう。

そして、復原された『大本文書』のマハッラの分布から、同文書の「城上(城内)」の5つの区分のひとつの特色が指摘される。つまり、ヤルカンド旧城の門を頭書し、それに接続するマハッラ群を4つの区域(A.~D.)に纏めて列挙している、ハレ(ハルトマン)のB192(E)の記載とは、区分の方法と揭示する区域の順番が異なっているのである。言い換えれば、『大本文書』の諸マハッラを束ねる5つの城上の区分は、城門を基準としていないのである。強いてマハッラの分布から規則性を求めれば、囲郭の中を北から南に斜断する帯状の区域が復原できる。すなわち、城上①—城内東北部・城上②—城内東北～東南部・城上③—城内中央部北～南・城上④—城内西北～南部、が考えられる。

残った城上⑤は、2つのマハッラだけからなり、かつ1つのマハッラはかの地で有名なアブダルという特異な人的集団に比定される。またもう1つのマハッラが金銀細工師(Zargarchi)に同定されれば、彼らは清当局(或いは以前のヤルカンド=ハン時代のハン)の直轄単位としての特殊な立場にあったのではないかと推察される。さらにまたこの城上⑤は、所管の官員(ベク)の地位も、他の官員とは異なり、西に隣接する農村ハン=エリック荘の管理も兼任しており、この点からも特殊な行政区画であったことが確実である。アブダル=マハッラは、ハレB192(E)では、A地区に置かれているので、強いて所在地を捜せば、城内西南隅のベグ官衙の近くあたりが候補地となるのかもしれない。

いささか推論を重ねる不確実な迷路に進みそうなので、ここでは『大本文書』の5つの城上の区分が、5つの門とは関連がないことだけを確認するに留めておく。そして同時代の他の史料から知られるヤルカンド市街を瞥見し、改めて

区分の基準や配列についての仮説を提示することにしたい。

四. オアシス都市の仕組みについて

1. 外来者の伝える回疆期の都市ヤルカンド

清朝軍がヤルカンドを占領したのは1759年であるが、その遠征軍を率いた將軍フデとアグイのマンジュ語の報告文書が残っている（『軍機處滿文錄副』1774-32, 乾隆24年閏6月18日 フデ（富徳）ら奏）。ヤルカンド＝オアシスの規模や人口などの初出の史料としてよく知られている一件であるが、都市ヤルカンドについては、実に簡単である。「ヤルカンドの南門に入り、北門に抜け出た。」これだけである。現地の民情などに、ほとんど配慮の必要を感じなかったマンジュ人たちの視線を象徴していると言いうるであろう。

むしろ都市住民などの情報は、外国からの訪問者によって伝えられるのが主体であり、筆者は以前に幾人かの記録による都市ヤルカンドの紹介を試みたことがあった〔堀87〕。詳細はそれに譲るとして、ここで再び提示するのが『大本文書』の成立時期に近い、1858-59年のヤルカンドに関するワリハノフの報告と都市図である。

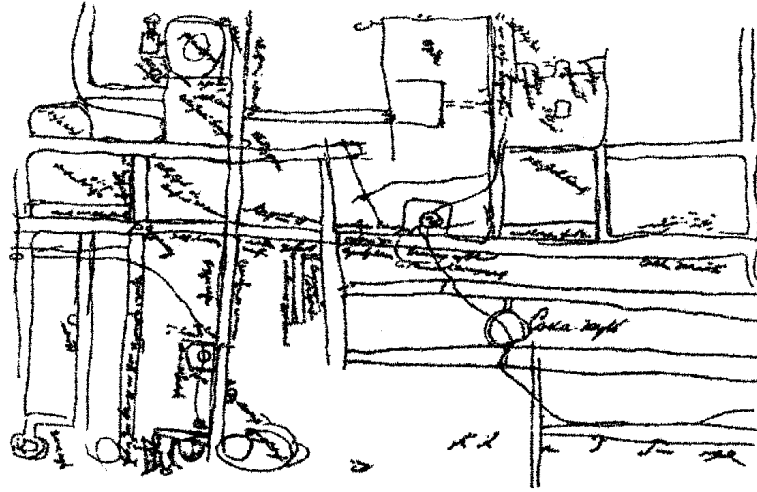
彼はその報告の中で、下記の5つの「区 (kvartal)」名に言及している。

- a. Urda-aldi > Orda Aldi 59.
- b. Soka-koli > Soqa Köl D-8.
- c. Aksakal-kuchesi > Aq-saqal K.
- d. Indusi-kuchesi > Hindu K.
- e. Nas Khoja Kuli > Nas Khoja Köl B-11.

これらのうち、a. b. e. の3つは、『地名図志』やハレ B192 (E) に見いだせるし、c. のアクサカルとはホーカンド人の領事であり、d. はヒンドゥー人の意味であろうから、外国籍人の集住する一角がマハッラを形成していたのであろう。この根拠は、ワリハノフが地名として挙げてはいないけれども、市内図に記入した燃料市場 (19.Ötäk Bazar) やアンデジャン人たちの住まい (D-24., -27.) などが、マハッラとして確認できるからである。ただし、当時の清の現地機関がこのような存在を公式に認めるはずもないので、当然その類の史料には記載されることはない。ともあれ、ワリハノフとほぼ同じ時期の『大木

附図Ⅶ 1858-59年頃のヤルカンド市内図

Valikhanov, Ch.Ch. Sobranie Sochineniy, 5 巻版, Alma-Ata, 1962. / 4 巻版, Almatui 1985.
tom. II, str.294 / tom. III, str.121



Подробный план г. Яркенда. Составил Ч. Валиханов. Перо. 1859 г.

文書』には見えないマハッラの存在が確認され、この史料の統治者的な性格の限界をここでも指摘しておこう。

ワリハノフはまたヤルカンドの市内の略図を掲げており、前掲の拙文には日本語訳を付けて示しておいた〔堀87; 44・堀85〕。その図を、今回は論旨の必要上、写真で掲示する。

2. 『大木文書』「城上」の区分と配列順の意味

a. キョルと水路

<附図Ⅶ>の併行した複線は道路を示し、丸い輪は貯水池 (köl) を示している。以前には筆者は気が付かず、またワリハノフ著作集の校訂編者も、不要な筆の走りとみなして、リライトした図では無視して省略した記号が、この原図には残されている。それは池と池を連ねて、道路と交差して引かれた曲線である。これは、ワリハノフが池に水を導く水路として記入した重要な情報に違いない。

そもそも都市ヤルカンドの水はヤルカンド河の支流からの引水に依存していた。18世紀の『西域図志』巻18には、「(ヤルカンドの市内の) すべてに貯水池があり、街の南の Qara-usu の水を引いて、街の北にまで至らしめ、これで飲

水・用水に供している（咸有水坑，導城南哈喇烏蘇之水，達於城北，是資飲用）」と伝えている。1892（光緒18）年頃の蕭雄『西疆雜述詩』（巻2）にも、「市内には溜池が76あり，それらのうちマンジュ池が一番大きい（城中有潦渠七十六處，以滿洲潦渠爲最大）」とあり，清代を通じて，溜池の存続が確認される。

ヤルカンド市内には大規模な泉源は知られておらず，近代の水道事業は深井戸の開掘で始まったとされている。⁴⁾ 古い時代からの郊外よりの引水と，それを貯めておく池の存在があれば，池と池を結ぶ水路は当然に存在したであろう。事実，筆者の1988年3月の現地調査の頃には，オルダ＝キョル（オルダ池）からノ＝トウィ（水路の台地）を通してジャミィに流れる水路が使われていた。現在では全く痕跡を残してはいないけれども，生活用水の水路とそれを取りまく利害関係には，重要な社会的な意味があったと考えられる。

そして水には高きより低きに流れる属性がある。筆者の調査で使用したGPS機の高度計は信頼度が低く，十分なヤルカンド旧市内の海拔高度の数値は得られなかったし，そのような詳細なデータ資料は見ることができていない。それでも，旧市内には10メートル近い高低差があり，それは北西部が高く，南東部に低い傾斜で分布していることだけは確認できた。

入り口である門と連結する居住区で括ったのではない，『大木文書』の城上の区分とは，この水路に連なる人的結びつきに由来するのではないのか。これが現在の筆者の到達した仮説である。無論，思いつきの域を超えていないレヴェルの愚案にしかすぎないけれども，今後の問題の解明へのひとつの視点に設定しておきたい。そして，これが本稿の地名のうちで「池（köl）」のつくものに，梓を加えて特記している所以である。そして嘗ては100以上あったと伝えられ，筆者が調査を始めた頃には20程は存在したヤルカンド旧市内のキョルは，現在では2，3の池が水を貯めているにすぎない。いずれは根絶するであろう，歴史的な資料を保存しておく意図も若干はある。

b. 『大木文書』城上の配列の意味

いよいよ最後まで保留しておいた疑問，『大木文書』城上①～⑤の配列の理由に，いささかの説明を試みてみよう。

ある対象を列挙する場合，その記載の順番は，配列そのものが記述する立場の価値判定を表す。とりわけ四庫分類に代表される漢字文明の配列順への拘り

は、中立的な10進分類とは無縁な歴史的世界観だと、筆者は認識している。そのような観点から『大木文書』の都市ヤルカンドの部分に注目すれば、そこでの混沌には困惑せざるをえない。『大木文書』の記事の大部分であるヤルカンド＝オアシスの農村集落の列举の処では、その記載順は整然たる秩序がある。つまり、清朝の現地駐在官の所在場所を起点に、近い処から遠い処へと、清官との距離を基準に配列しており、これが彼らの創成になるかは別として、疑念を言いつのる必要は全くない。

ところが5つ「城上」の掲載の順番には、記述する立場の価値－序列－の判定は見い出せない。少なくとも1855-56年の実情を反映したものでないことは確実である。先掲のワリハノフも明言するように、商業施設は西のアルトゥン門から街の中心部へと展開しており、1873年にこの市内を廻ったチャップマンの報告も同様にアルトゥン門から筆を起こしている。⁵⁾ また行政の中心が南のハンカー（ホタン）門の内側に集中していたことも、諸記録の等しく伝えることである。つまり都市ヤルカンドの経済的・政治的な重点は、アルトゥン門からハンカー門とを結ぶ、市域の西北から南部の一角にあり、それは『大木文書』区分での「城上④」に相当する。これが何故に最初に置かれなないのかが問題なのである。性格にはやや不明な点はあるハレ192 (E) 文書でも、アルトゥン門を筆頭に、ハンカー門と続き、もっとも農村的なテレック＝バグ門・カヴァト門を最後に並べ、都市の案内としては明確な序列を保っている。

ひるがえって『大木文書』城上①は、1850年代にはさしたる公共施設のない住宅地であり、現在では市（鎮）から外れて農村の郷の村に編成されており、城上②も同様である。前節で述べたように、この城上①は、ハレ192 (E) 文書のD区域に相当し、市内で一番高い処がある。用水路の水回りとの関連が、ここでも想起されるが、『大木文書』の配列には、もう1つの理由が推測される。

今回のヤルカンド市内の地名の検討では、筆者が以前にカシュガルで試みたような〔堀92〕、地名の語義からの都市史の再構成には至らなかった。この街の地名に人文的要素が少ないことが、原因の1つであり、キョル名と並んで今後の課題である。ただし、オルダ（宮殿・官庁）の名前が3箇所に残っていることは確認できた。これらのオルダの由来についての現地での聴き取りでは、諸説が錯綜していて明確ではない。ただし、2つのオルダ名が、清の進出以前

のものと伝わっていることは確認できた。

『大本文書』の5つの区画の配列は、これらの古くからのオルダに始まる、都市ヤルカンドの拡大の経過の痕跡ではないのか。これが、筆者のもう1つの仮説である。

もしそうであったならば、清の回疆の統治が、オアシスの中枢である都市の住民組織についても介入せず、以前からの構造を踏襲しただけの、上部の枠組みのみの制度であったことになる。ただし、そのような判定を下す前に、あくまで思いつきの域を出ていない私案を検証する、視点を変えた実証作業が必要であることは強く自覚している。

お わ り に

本稿のような試みは、現地での精密な調査や郷土史家との共働ができれば、ほとんど不要な作業に過ぎない。しかし、そのような条件が叶わぬ現状であっても、外国所在の文献を援用した仮説を公開しておくことは、今後のオアシス都市研究の促進に、幾ばくかの貢献になるのではないかと考えている。

ともあれ、本稿でのヤルカンド市街への言及によって、筆者の『大本文書』の地名比定は、その初歩的な考察を終了した。以降には、これまでの試案の不断の修正とともに、地名の語源・語義とその背景、そして漢字表記の音韻的な説明などの課題に取り組むことになる。

註

- 1) CORONA 衛星写真については、〔相馬2000; 39-40〕を参照されたい。

なお、この画像データの入手・解読については、奈良女子大学の相馬秀廣氏と同大学院生の諸氏の多大のご支援を得た。

- 2) この史料は、青山学院大学研修生の菅原純氏から複写の提供をうけて利用できた。
- 3) 本文書の地名には、末尾に「マハッラ」の付いていないものが3分の1程ある（Aで16/23, Bで9/26, Cで9/32, Dで2/28）。これは、記事そのものが紙片の右端に寄せて窮屈に書かれているが故であり、配慮の外に置く。いずれ写真の掲載許可をえた後に、改めて紹介をするつもりである。
- 4) 莎車県地方志編纂委員会『莎車県志』ウルムチ 1996, 479-80頁。
- 5) Chapman, E.T., A Ride through the Bazar at Yarkund *Macmillan's Magazine* 30, May 1874

参考文献

- 相馬秀廣（2000）トルファン盆地の遺跡の立地条件－CORONA 衛星写真の判読を中心として『シルクロード学研究』8, pp. 37-78.
- 堀 直（1979）清朝の回疆統治についての二、三の問題『史学雑誌』88-3, pp. 1-36.
- 堀 直（1985）ヤルカンドの町のプラン
山田信夫『＜ビジュアル版世界の歴史10＞草原とオアシス』講談社, p. 236.
- 堀 直（1987）回疆都市ヤールカンド『甲南大学紀要 文学編』63, pp. 39-51.
- 堀 直（1992）カシュガル旧城居住街区の点描『＜甲南大学総合研究所 叢書26＞環境と文化』, pp. 37-56.
- 堀 直（1997）『大木文書』の年次についての補論『内陸アジア史研究』12, pp. 13-22.
- 堀 直（2001）回疆の社会経済文書について『西南アジア研究』54, pp. 84-107.

附記：本稿は甲南学園平生太郎基金科学研究奨励助成金による「『大木文書』の研究」の成果の一部である。この研究に関連して提示した資・史料のすべては、甲南大学文学部歴史文化学科の堀研究室にて公開されている。